



食材の仕分けには多くのボランティアが協力しています

や在宅での生活で予想以上に食費がかかる」との声を聞いています。そのため、社協ではどうぞ便の事業を通じてつながるNPOや企業の支援を受け、現在月1回の配達を増便することを検討しています。

今後の新たなニーズにも対応していきたい

今後学校が再開されることで、子育て家庭のさまざまな課題も生じてくる可能性があります。しかし、これまではどうぞ便を通じてつながる町内50世帯約200人とボランティア、社協職員のゆるやかなつながりが途切れることはありません。

松崎さんは「2年間のどうぞ便実施を通じて、社協のコミュニケーション力や、個別ニーズが出てきた時の対応、そして支援を必要とする子育て世帯の支援の出口までを見据えた戦略を、職員や関係者間で共有することができるようになりました。現在の感染症防止対策のもとでも、その影響が落ち着いた後も、自分たちのできる範囲で町民のニーズに敏感に対応し、タイムリーに支援につなげる取り組みを引き続き続けていきたいです」と語ります。



も添えられます。松崎さんは「配達する食材は直前にならないとわからないこともあるので、そのなかでどのように献立を提案するか、ボランティアの管理栄養士に工夫してもらっています」と話します。

配達ボランティアは各世帯に宅食を届ける役割とともに、配達先の世帯から相談ごとが寄せられた際には社協職員につなぎます。「配達ボランティアは、町のボランティア連絡協議会で活動されている方や、民生委員・児童委員に直接声をかけ協力をお願いしました」と松崎さんは話します。配達ボランティアは、日頃の活動では配達先の世帯の状況に踏み込まず、何かあった時には親身になって話を聞くことのできる人生の先輩の役割を果たす、60歳代から70歳代の方が中心です。

ニーズを具体的な支援に展開する

どうぞ便の利用世帯には、どこに相談すれば分からず、配達ボランティアに就職や就学について相談することもあるとのことです。ボランティアから報告を受けた社協職員は、相談を寄せた世帯と連絡を取り解決策をともに考えます。

これまでの例では、シングルマザーの就労について相談が寄せられ、働き

ながら資格を得るため看護学校への進学をサポートしました。また、学校の授業に追いつくことが難しい中学生の子どもを持つ母親からの相談には、その子どもに絞った学習支援を行うこととし、社協から学習支援活動ができそうな人に声をかけ、継続的に支援を続けてきました。その結果、高校進学を果たすことができたとのことです。松崎さんは、「学習支援のニーズが明確なので、ボランティアへの協力依頼も具体的に行うことができました」と話します。現在は、どうぞ便を通じて不登校の子どもへの心配が寄せられ、教育委員会と連携して支援を進めている例もあります。

コロナ禍でも継続できている世帯への個別訪問

現在、感染症拡大防止のため、どうぞ便の仕分けはボランティアに休んでもらい、社協スタッフが行っています。一方、各世帯への配達にはボランティアの力を借りて、世帯訪問時にはマスクや手指の消毒など感染防止の対応を行いながら活動を継続しています。

この数カ月のどうぞ便実施を通じて、ボランティアは配達先の世帯から「月1回だけ配達を楽しみにしている」との声をもらうとともに、「学校の休校

